

徒然草

組 氏名

公世の二位の兄人せうとに、良覚僧正りやうかくさうじょうと聞こえしは、きはめて腹あしき人なりけり。坊ぼうのかたはらに、大きな榎えの木きのありければ、人、「榎えの木きの僧正そうじょう」とぞ言ひける。「この名なしかるべからず」とて、かの木きを切きられにけり。その根ねのありければ、「切りくひの僧正そうじょう」と言ひけり。いよいよ腹立ちて、切りくひを掘り捨てたりければ、その跡あと 大きな堀ほりにてありければ、「堀池ほりいけの僧正そうじょう」とぞ言ひける。

(第四十五段)

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢もろやをたばさみて的に向かふ。師のいはく、「初心しんしんの人、二つの矢を持つ事なかれ、後のちの矢を頼みて、始めの矢やに等閑なほざりの心あり。毎度ただ得失とくしつなく、この一矢ひとに定むべしと思へ」と言ふ。わづかに二つの矢、師の前まへにて一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠けだいの心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ、万事ばんじにわたるべし。

(第九十二段)

高名かうみやうの木登りといひしをのこ、人をおきてて高き木にのぼせて梢ていせを切らせしに、いと危あやふく見えしほどは言ふ事もなくて、降るる時に、軒長のきたけばかりになりて、「あやまちすな、心して降りよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び降るとも降りなん。如何いかにかく言ふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき、枝危えだあやふきほどは、己おのれが恐れ侍れば申さず。あやまちは、やすき所になりて、必ず仕つかまつる事に候ふ」と言ふ。

あやしき下臆げらふなれども、聖人の戒めにななへり。鞞まりも、難かたきき所を蹴けい出してのち、やすく思へば、必ず落つと侍るやらん。

(第一〇九段)

城陸奥守泰盛じやうむつのかみやすのりは、双さうなき馬乗りなりけり。馬を引き出させけるに、足をそろへて鬩しまをゆらりと越ゆるを見ては、「これは勇める馬なり」とて、鞍くらを置きかへさせけり。また、足をのべて鬩しまに蹴けあてぬれば、「これはにぶくしてあやまちあるべし」とて、乗おらざりけり。道みちを知らざらん人、かばかり恐おそれなんや。

(第一八五段)